

—JNMS のページ—

Journal of Nippon Medical School に掲載した Original 論文の英文 Abstract を、著者自身が和文 Summary として簡潔にまとめたものです。

Journal of Nippon Medical School

Vol. 83, No. 4 (2016 年 8 月発行) 掲載

Objective Spectrometric Measurement of Keloid Color in the East Asian Population: Pitfalls of Subjective Color Measurements

(J Nippon Med Sch 2016; 83: 142-149)

東洋人における色測定装置を用いたケロイド色調の客観的評価：主観的評価における盲点

青木雅代 赤石諭史 中尾淳一 土肥輝之
百束比古 小川 令

日本医科大学付属病院形成外科・再建外科・美容外科

目的：癬痕・ケロイドの色調は重症度や治療効果を評価する指標の一つであるが、主観的な評価のみでは評価する者に依存し、治療効果の判定が困難な場合がある。また、客観的な評価が行われていないためケロイドの色調についての十分な検討はまだまだされていない。われわれは、色測定装置を用いてケロイドの定量的色調測定を行い、統計学的に検討した。

方法：CORTEX 社製の DermaSpectrometer[®]を用い、2009～2010 年に当院形成外科の外来を受診した 30 症例 (33 ケロイド) に対し測定を行った (n=33)。ケロイドにおける Erythema/Melanin の測定値を Ek, Mk とし、コントロールとして前腕屈側の正常皮膚における測定値を Ec, Mc とした。初診時の自覚症状の強度を 4 段階で評価した。Ek, Mk および Ek/Ec, Mk/Mc における部位・年齢・性別・自覚症状の強度との相関関係について統計学的有意差を検定した。主観的な色評価の正確性について検討を行った。

結果：Ek, Mk ともに部位・年齢・性別・自覚症状の強さによる有意差は認めなかった。Ek/Ec では 40 歳未満は 40 歳以上と比較して有意に大きく、女性の方が男性よりも有意に大きかった。主観的な色評価は、Ek ではなく Ek/Ec に左右されることが明らかになった。

考察：若年者や女性において Ek/Ec が有意に大きく、ケロイドの発赤が強く評価されやすいと言える。一方、高齢者や男性で、主観的に発赤が強くないと判断される症例

でも重症度が高い場合があり、注意が必要である。自覚症状の強さとの相関は認められず、色調のみで重症度を評価するべきではない。色測定装置は客観的・定量的評価が可能であり、東洋人におけるケロイド色調の正確な評価に有用であると言える。

Utility of Measurement of Serum Lactate in Diagnosis of Coagulopathy Associated with Peripheral Circulatory Insufficiency: Retrospective Evaluation Using Thromboelastometry from a Single Center in Japan

(J Nippon Med Sch 2016; 83: 150-157)

末梢循環不全に伴う凝固異常の診断における血清乳酸値の有用性について：Thromboelastometry を用いた単施設の後方視的研究

小網博之¹ 阪本雄一郎¹ 櫻井良太¹ 太田美穂¹
後藤明子¹ 今長谷尚史¹ 八幡真由子¹ 梅香 満¹
三池 徹¹ 永嶋 太¹ 岩村高志¹
山田クリス孝介¹ 井上 聡²

¹佐賀大学医学部救急医学講座

²佐賀大学外傷先進治療学部門

背景：近年、血清乳酸値は末梢循環不全の指標として広く使用されている。こうした循環不全はしばしば凝固異常を引き起こすことが知られているが、これまでの多くの報告は血漿検体を用いたものであった。そこで本研究では、血清乳酸値が循環不全に伴う凝固異常を適確に診断できるかについて、これまでの血漿検体を用いた凝固検査に加えて、全血を用いた凝固能検査である Thromboelastometry (以下、ROTEM) を用いて検討を行った。

対象と方法：2013 年 1 月から 2014 年 9 月までに当院に救急搬送され、救急外来にて収縮期血圧、血清乳酸値、ROTEM を測定した成人患者 192 例を対象とした。すべての患者は、血清乳酸値を元に 3 群に分けられた；(1) 重症群 (≥ 4 mmol/L, 41 例), (2) 軽症群 (< 4 or ≥ 2 mmol/L, 59 例), (3) 正常群 (< 2 mmol/L, 92 例)。患者背景や既往歴、バイタルサイン、血液ガス分析、血液検査所見、ROTEM 所見、臨床転帰について後ろ向きに解析した。

結果：重症群は、年齢が有意に若かったが、pH は低く、予後も不良だった。また、重症群はほかの 2 群に比べて収縮期血圧は有意に低く、心拍数も高かった。さらに PT-INR

やAPTTも有意に延長していた。重症群のROTEM所見は、有意に α 角が低下し、Lysis Onset Timeが有意に短く、線溶亢進を示した症例が有意に多かった。同様の検討を、収縮期血圧90 mmHgをカットオフ値にして2群に分け解析したが、ROTEM所見では有意差は認めなかった。

結論：血清乳酸値 (≥ 4 mmol/L) は、末梢循環不全を正確に反映するとともに、線溶亢進や凝固能低下などの診断にも有用であった。

Evaluation of Postoperative Pain Control and Quality of Recovery in Patients Using Intravenous Patient-Controlled Analgesia with Fentanyl: A Prospective Randomized Study
(J Nippon Med Sch 2016; 83: 158-166)

フェンタニルを用いた経静脈的患者管理鎮痛法による最適な術後疼痛管理の構築

尾中寛恵¹ 石川真士¹ 水口義明² 内田英二²

坂本篤裕¹

¹日本医科大学大学院疼痛制御麻酔科学

²日本医科大学消化器外科学

背景：適切な術後疼痛管理を行うことは患者満足度の向上や患者アウトカムへの改善が報告されている。本研究では、IVPCAの最適用量の検討と術後疼痛コントロールと患者満足度(QoR-40)との関連性を評価することを目的とした。

方法：当院で全身麻酔後にIVPCAにて術後疼痛コントロールを行った288人に対し疼痛評価と嘔気嘔吐など副作用についての後ろ向き解析を行った。続いて、前向き研究として、2013年6月から2015年3月までに腹腔鏡下胆嚢摘出術を対象にIVPCAのフェンタニル濃度を無作為に2群(F15:フェンタニル15 μ g/mL, F30:フェンタニル30 μ g/mL)に分け、術直後、術後1日目、術後2日目の安静時と体動時のVAS, QoR-40, 術後嘔気嘔吐などの副作用について比較検討を行った。

結果：後ろ向き研究では全体の約20%で強い術後痛の訴えを認め、また約18%で術後嘔気嘔吐を認めた。前向き研究では、F30群において術後1日目の体動時VAS値($p \leq 0.05$)とQoR-40各5項目(身体の調子, 身体的能力, 精神面, 疼痛, 患者への支援)の疼痛項目で術後1日目($p = 0.021$), 2日目($p = 0.024$)ともに有意に良い結果が得られた。またQoR-40で、疼痛項目は感情面($p < 0.05$)と各5項目の総合($p < 0.05$)とでそれぞれに正の相関関係が認

められた。また副作用においては2群間で明らかな有意差は認められなかった。

考察：低侵襲手術の進歩により、患者アウトカムの改善がなされてきたが、依然として術後疼痛の訴えは多い。本研究においても疼痛評価においてF30群のほうが有意に良い結果が得られた。また術後回復における患者満足度の相関関係より、早期の術後鎮痛が患者満足度に影響を及ぼすことが示唆された。

結語：腹腔鏡下胆嚢摘出術のIVPCAにおいてはフェンタニル30 μ g/mL群のほうが疼痛効果に優れていると考えられた。また適切な術後疼痛管理を早期に行うことは疼痛緩和だけでなく、感情面など精神的にも良い影響を及ぼすことが示唆された。